

柳香著 國爰画
明治十五年三月発売

金松堂壽梓

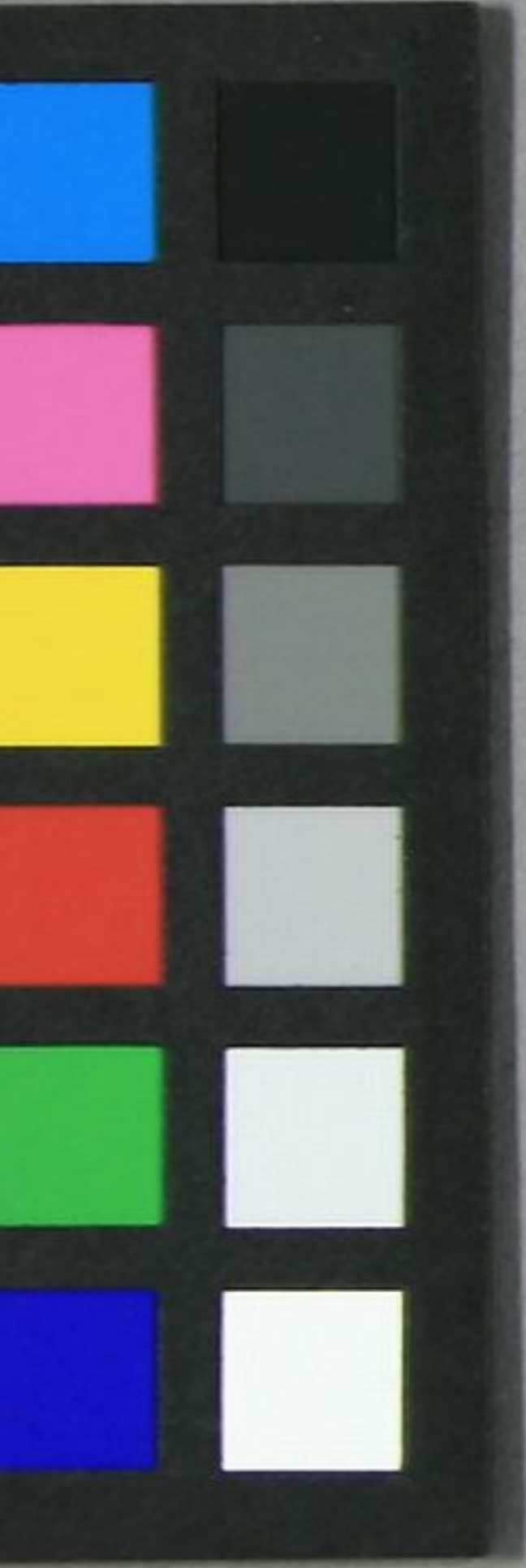
天網船
貳編

下

中

上





天網船
貳編



65

60

55

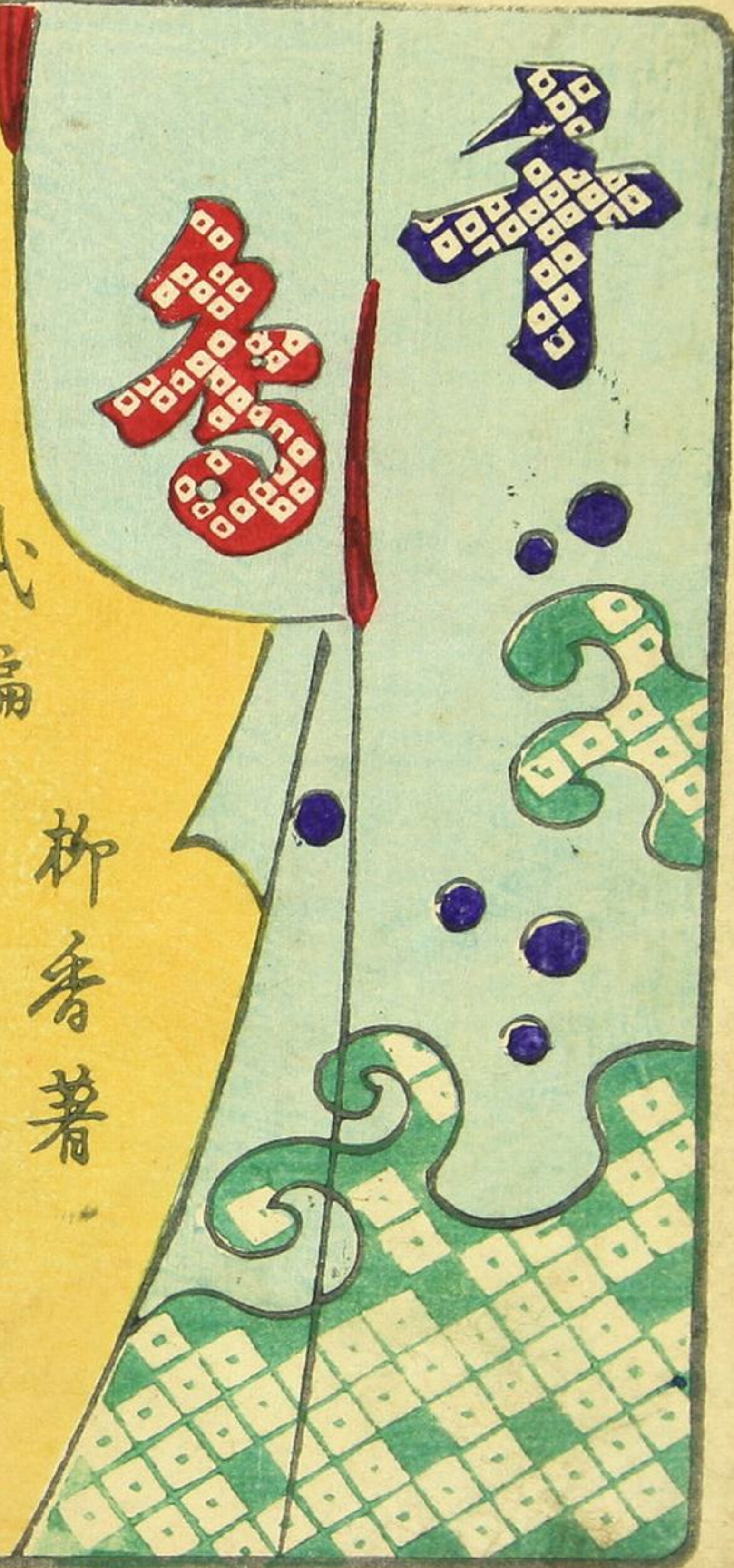
A582
9

天の網船
之卷
金松堂梓

武編

柳香著

國斐画



48-8425

燕安へ鳩毒あり勉強へ苦薬ありと往昔の人も誠められ遊惰は耽
る頭上は砒鉞開も川島が病根へ親の庭訓の甘口で育て揚る虫の毒
積りくく不養生脾胃と損せし放蕩の平脈ありぬ治難の症一時に補
劑の功効を振起したる奮発心身と粉薬を打碎き人民保護の大
任も健忘症よ忘る果懲り眼の立間と血道と揚て心経の狂ひ出たり
意馬心猿身の尾張樓の夜の風悪寒とまりて轉寐の魔睡薬の夢と
覚司法よ盡し法学生へ傷と隠せる膏薬貼表面へ立派な癒して毒ハ
五臓は葛藤附漸次よ重る衰弱は手後とある治療の法施術の尽し
九死一生我と我身と患むる毒と薬の配劑と取違ひする忌踏る海
で飯らぬ水加減煎詰る勸善懲惡天刑病の天の網船著者柳香
が需めよ應下て二編の小序と記を者ハ

明治十五年第三月

百六齋三浦花時





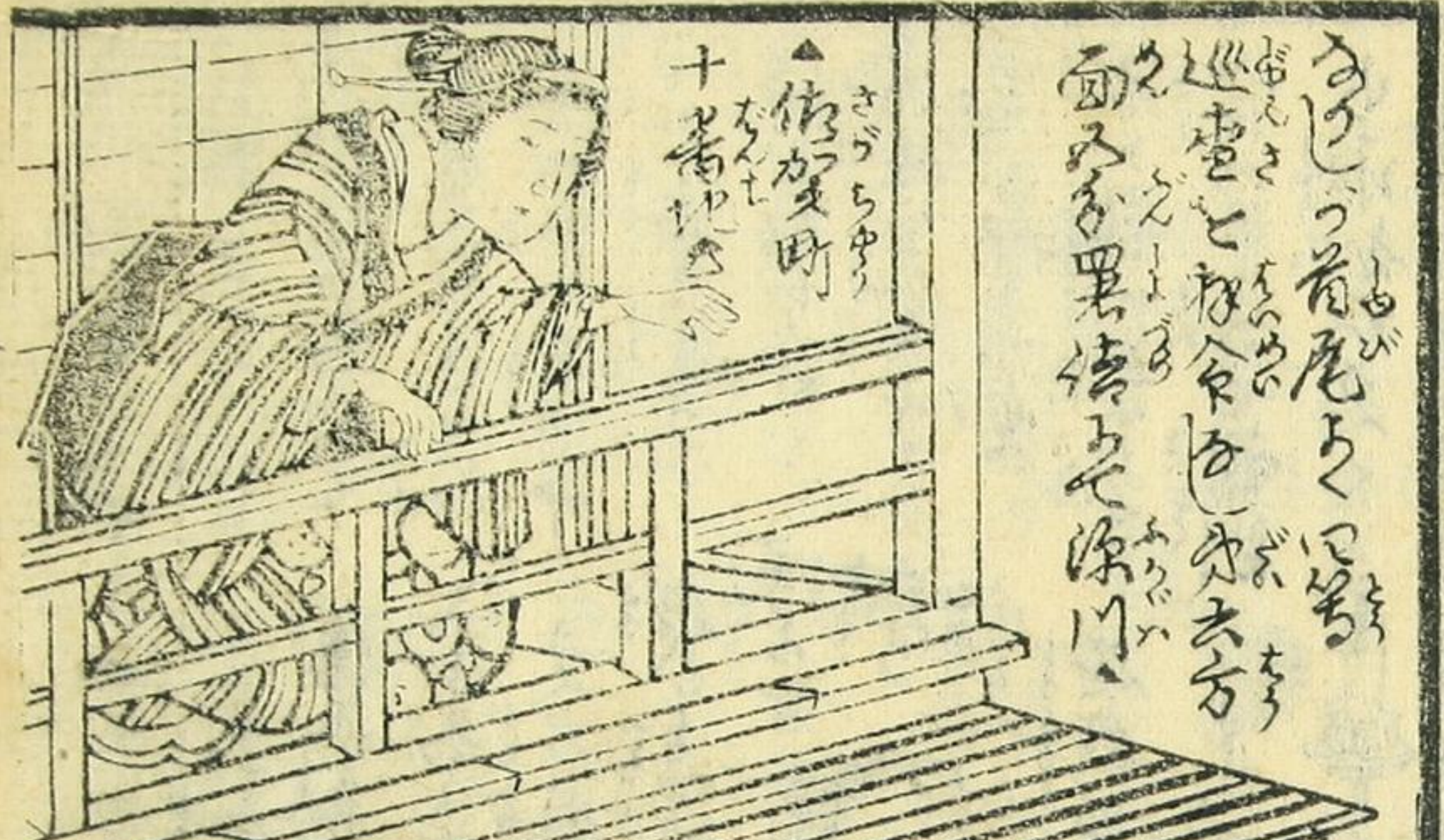
川衛天網船 第二編 卷上

彩霞園柳香著

恩へむくむととて念うと世の比喩もあつてみれど
 舟の念もよまるとたの其着恩義をうけたりし人よつとを
 の心成急う天理の背く所あり終つて笑ひ紙に方よ
 布く例へ迫き省一糸が陳陳保の恩義を忘却し之
 早晚同人の妻おとねと怪しむ中とありたるがれと此
 ありと云へる女に東系赤坂の橋より怒りかゝむ組
 組の老よ継つる燭法一巻をよまぬ南系と己の
 常用よして居りしが近所省一糸が来りしより疾
 く心とあつるあを主人の不立よあをとりけり

川野二上

三



▲佐々木町
十番地

あはれう首尾よく
巡査と相合はる
面も異情を深し

安
尾
罪

再遊して成日巡行のとなれ
安尾港といふ小橋子の羽衣雲井との
坂地あり眼よつて志
らほぬ大腔ふ由官後
のまをき様とておたをたを
ねとあがねは終ぎも情中
一全の行へとを由
あつさるや眼よつて
あつさるや眼よつて
者とつとぬり
し世ふのいぬ
るの業をいぬ

不吉 省一帯は彩めは忽ち
兼備てかよひと佐松松代の
中村屋といふる藝妓
又茶屋百四
よそ出稼ぎ
させしが省一帯は
その金の尖と交え行く
の難儀がわつと別はし後
路を察するは職する何業と
いふ官復へ四門急と何々の人
あまことしは優つて巡査志願と
形は出しつ明後九年四月の



の片可わつて省よ返る浪人の園
とてあつね徳とあはれが省一帯の
遊くは智強の業ありはしそ二
巡査とまで昇官へあつたも此
街の中は接するよう自意と病

仲町の●



ついで奥の襖へ掛
 老より只今掛ひ
 ついでせむ者掛者
 下宿人来るべしと
 引連するまき取りし
 由らさきさきの川邊
 省一帯由身の不
 然令一云の返答
 由らさきさきの川邊
 省一帯由身の不
 然令一云の返答
 由らさきさきの川邊
 省一帯由身の不
 然令一云の返答



ある久居の
 省一帯の
 國日校の
 法務学校と看板の
 長内より出る書生
 省一帯の
 國日校の
 法務学校と看板の
 長内より出る書生

自ら掛だ
 業ありといふ
 悔悟の表と
 何卒して
 携と勉強せんと
 主知此処と
 まや小高附紳
 田綿所子周級
 法律学校校長
 元田直氏との
 後学事と有る



元元考
 省一帯の
 國日校の
 法務学校と看板の
 長内より出る書生
 省一帯の
 國日校の
 法務学校と看板の
 長内より出る書生

「三」被り入て物持し功多の後と直と主産ふ故に
一由り身と治めと治ふ並母が居と持せしそれお
らと持と考よ来てこの



公衆
の使
用
世

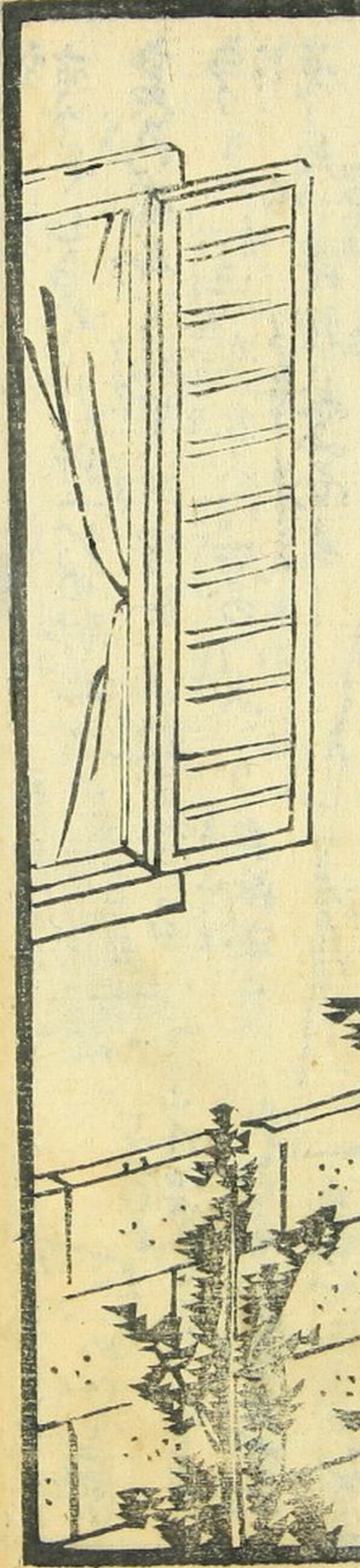
有がくむをれと精神一約の耐性
多る為魂名と後世の功多と主産ふ故に
多うこれ却治前一帯の門入り文附西も
是れ一帯の門入り文附西も
今と云へふおて
後梅西らち色
り須更みて校
長元田氏出きて面を
され物等の用めて来り世と居ねおきて
省直事入迄来不品ゆふ身と持器一あゆふ
今日ふより後梅の朴きとの足屋う法律業と
研究一これおゆふ見も終ふを一これおゆふ



●小降る上は其の
善心と忘れまふ勉勵の
程元の安堵あるやうせつる
べし学治のつたの格者より
會計掛へやを考へる

つぎるをまき入校するがうと悪き由
 この元田氏が穉小川橋ふく長松と直
 りりして日校の学僕何やうとあつた
 水の業とをまき入校するがうと悪き由
 みつゝと就学を一夜勉強を
 さうさうがゆかの規則の
 教重よの意清癖の省一糸

△由家やうの園都さうとれど
 うそ耐地のあぶらさうと
 只愛徳あま眼とさうと
 供とさうとさうと



銅版開化玉篇 全 開化女用文 全

近世紀問 三十一卷 増補 國史畧字引 全

日本小史 七巻 増補 銅版日本史類玉篇 和本社立 洋本社立

明治節用集 全 義烈天田百首 全

漢語のろは字引 全 金松百人一首 全

補算法大成 全 倭百人一首 全

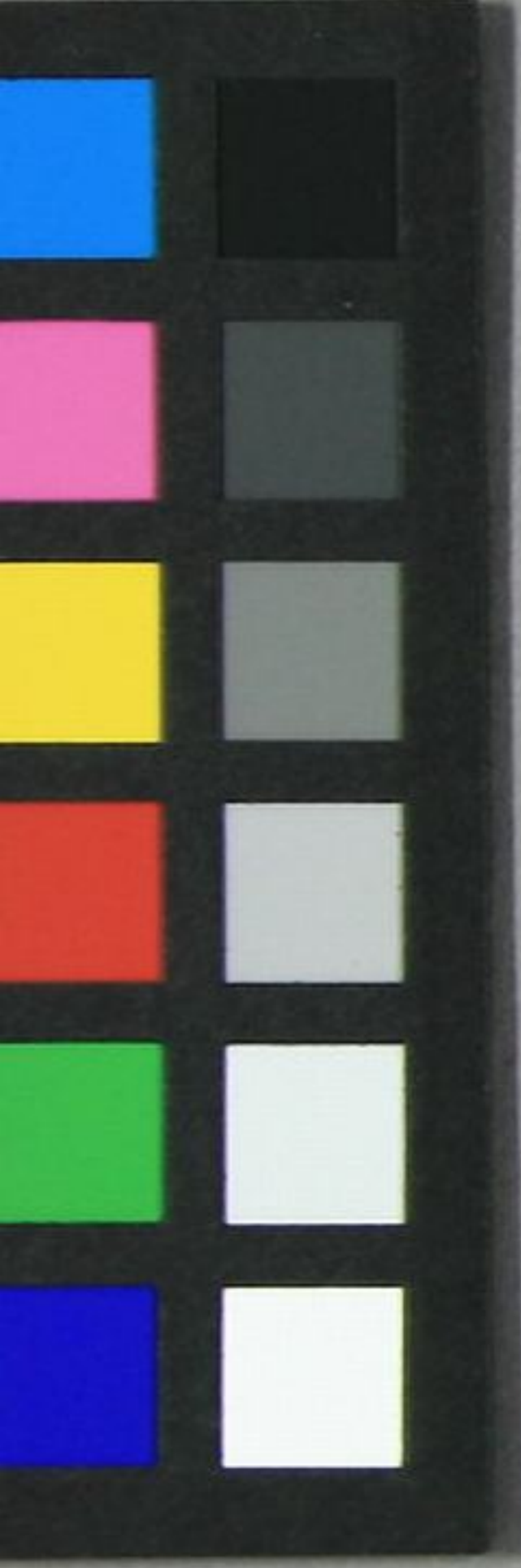
雑俗日用文 全 二冊袋入五編より十編讀切

開化三休用文 全 之處ヲ合本厚表紙樹々美本

文 錦繪 書肆 問屋 金松堂 辻岡文助

東京横山町三丁目





4542
5



天の

舟

新

新屋し

中紅巻

柳秀 著

国政画

辻文齋梓

48-8426

川衛天網船第二編卷中

彩霞園柳香著

何れも同じ書生船をうちらるるだてみ大人を月日曜の休日と購め
て来たる牛肉は著つき念ふおぼろ船「ヨサ波下見君く君のやうに
肉をうりよ製とがしそい募集金の割賦は不公年と表す？ 須
らくみかも喫ふてーサラット合点あー一昨夜の焼芋代ハ僕が
會付しこれとタツタ一切らくは運今あへく牛をのりて年よ
うものご「アアそと心みかくの海り子アア、一君へまご昨夜根津
へシケとる「アコレ静よく実ハ郷里の友人よ尋ねらる同人が
星北よの一云やむと冷む器編く一遊歴けつこうるやむ王をのむ
さ「その代り今日休日ご大奮興の勉強サ「イヤ何と武君遊
頃集つと川島とら又男の校長（遊歴判の学僕うけをを我く日柳
校業ささるやうよあつて中との勉強家サ吾くも感服く「今日も次

川野中

つまじ入難る一七九の
 功のついでに後不の
 火せざるへ焼燔を
 ぐらまづくまを
 返まろとよるまを
 何れかへ今一房勉法
 意記さすへ生法
 の基と世の候を
 何れかへ今一房勉法
 意記さすへ生法
 の基と世の候を



省
 小見形よと村
 磯村の川
 浪巡回
 省
 月給僅少の産
 変るれと待遇
 くさる、由

親族何れも又焼入
 且とねみま
 何れかへ今一房勉法
 意記さすへ生法
 の基と世の候を



あても
 月給僅少の産
 変るれと待遇
 くさる、由
 省
 小見形よと村
 磯村の川
 浪巡回
 省

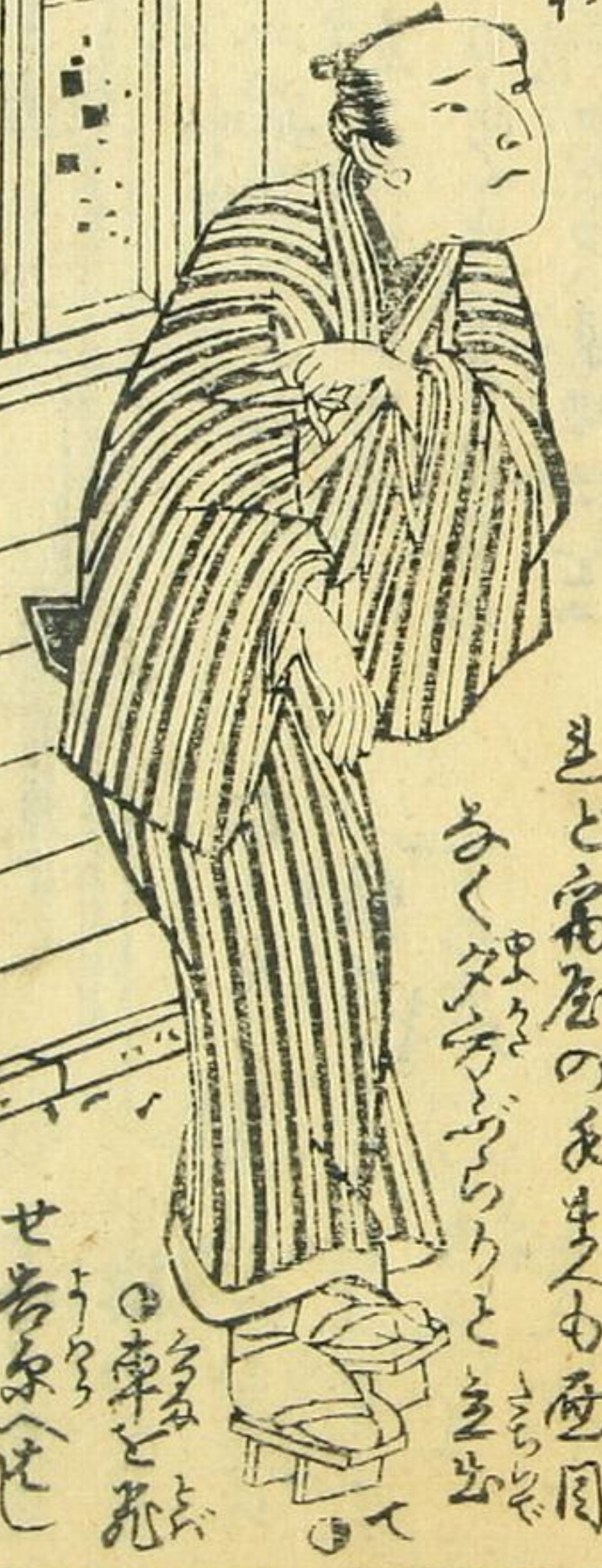
つぎと入り来る千代を襦の若者も
こぼれとわらわぬ近人と若者あつと
引きあみだう省一帯の横面と見よ
あつとあつとあつとあつとあつと



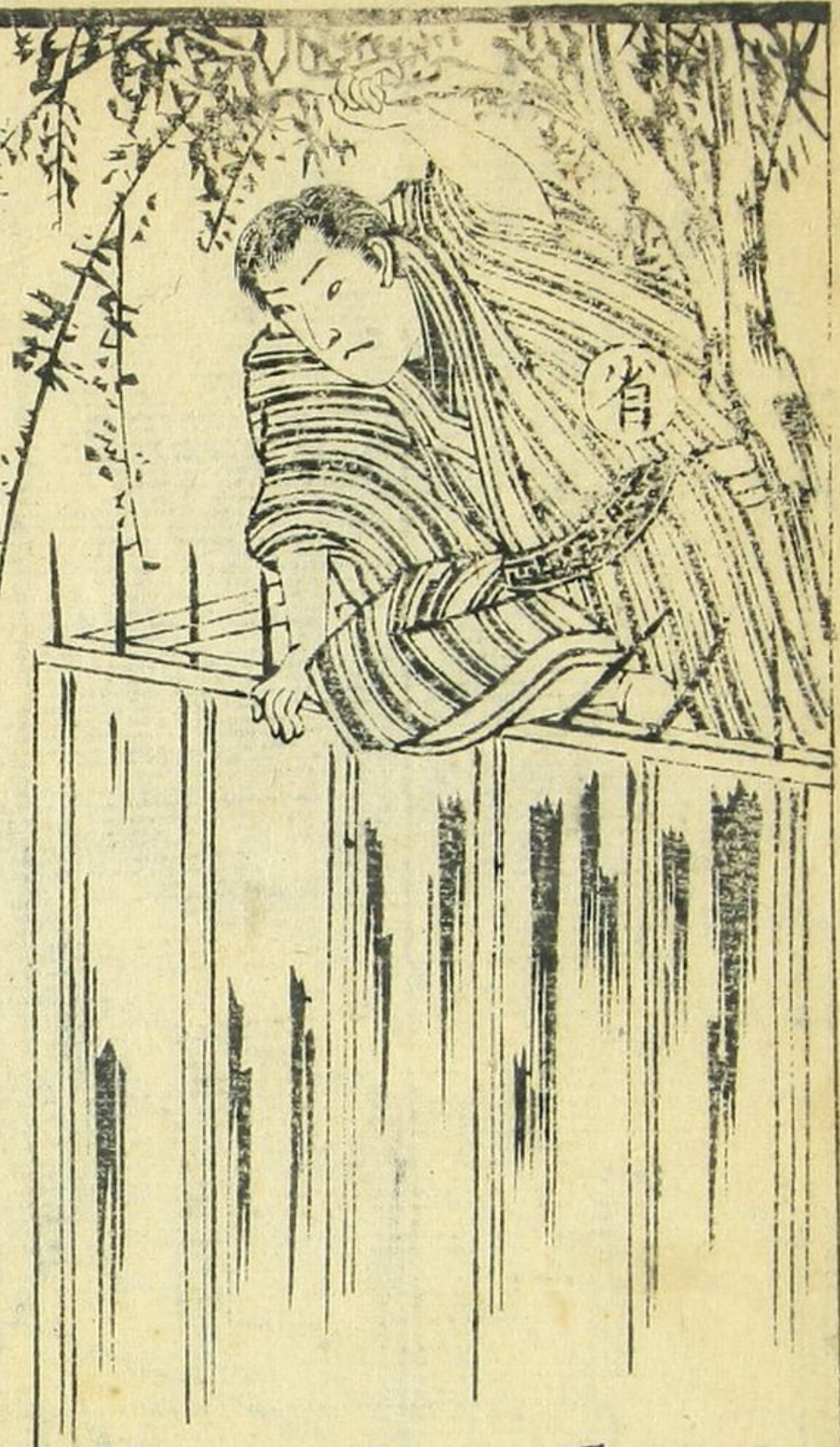
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

ととあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと



あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと



「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」

「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」
 「省」の「省」は「省」

銅板開化七篇	全	開化全用文	全
近世紀聞	全	國史器字引	全
日本小史	全	義烈天四百首	全
明治節用集	全	金松百人一首	全
漢語の字引	全	金松百人一首	全
算法大成	全	俳百人一首	全
雑俗日用文	全	二冊袋入五編	全
開化三休用文	全	十巻番出	全
文	全	東京横山町三丁目	全
錦繪	全	金松堂	全
問屋	全	辻岡文助	全

010190514361

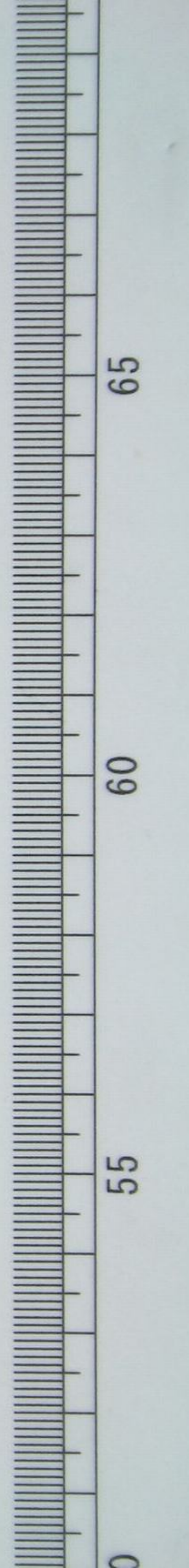




柳香著國爰画
明治十五年三月発売

金松堂壽梓

下



川
ちぎ川
新
魚人
下
の
ま
た

らん
お

あ
み

柳
香

ふ
ね

著

園
浦
香
魚

香
松
香
と
梓

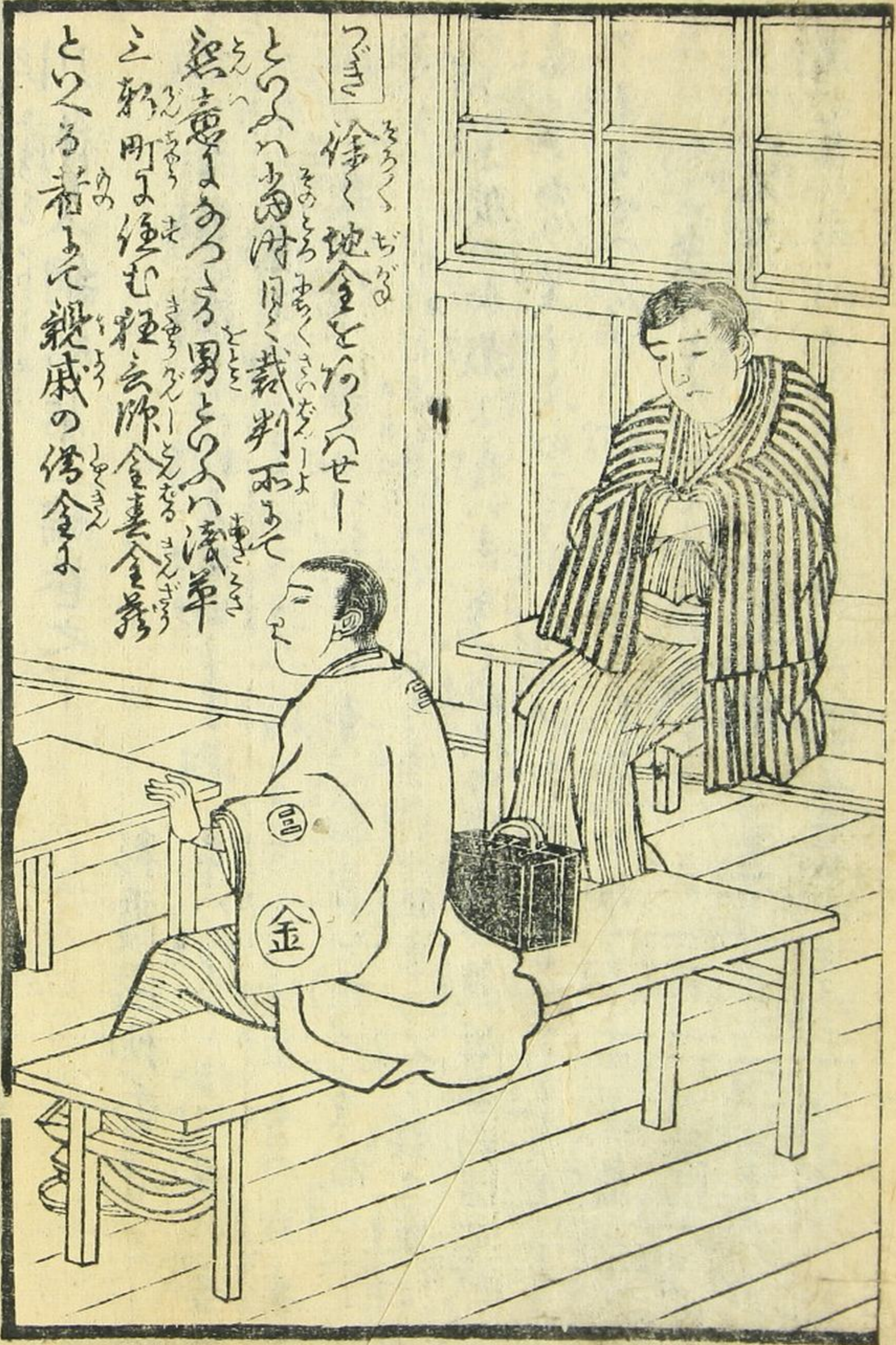


川
衛
天
網
船
第
二
編
卷
之
下

彩霞園柳香著

濃り産後の發ぎふゆは抜かして一帯のゆるぎを掃拂の
と糸之澤よ流る細る傳ひ通る為疾の清草色の或安
泊よ一夜と明し翌日の外套と賣て旅費と捨くまごぬはと
帰るいしれど不測は宅へのぬり魚柳の無きの人よ頼り
のふた枝の助教は夜はまきか或人の用統で然る裁判の代
書人となり翌十年の二月中同刑事保の書記よせり十一年
の暮までい何や斯やを半よを職とあり馬喰町四丁目の
まるれよあつとんとんといを是を禱儀とあり馬喰町四丁目の
方へ止宿として後代を免件と出願すると儀俸も採用され
省一帯のあつとんとんを堅れとありバ通を是の代人ともあり

川
衛
下



つぎ 借く地金とあつたせー
 とのふいふ財目と裁判あつて
 意よりあつた男とのふいふ清平
 と新所は任む程云所金妻金持
 とつる者よて親戚の借金よ



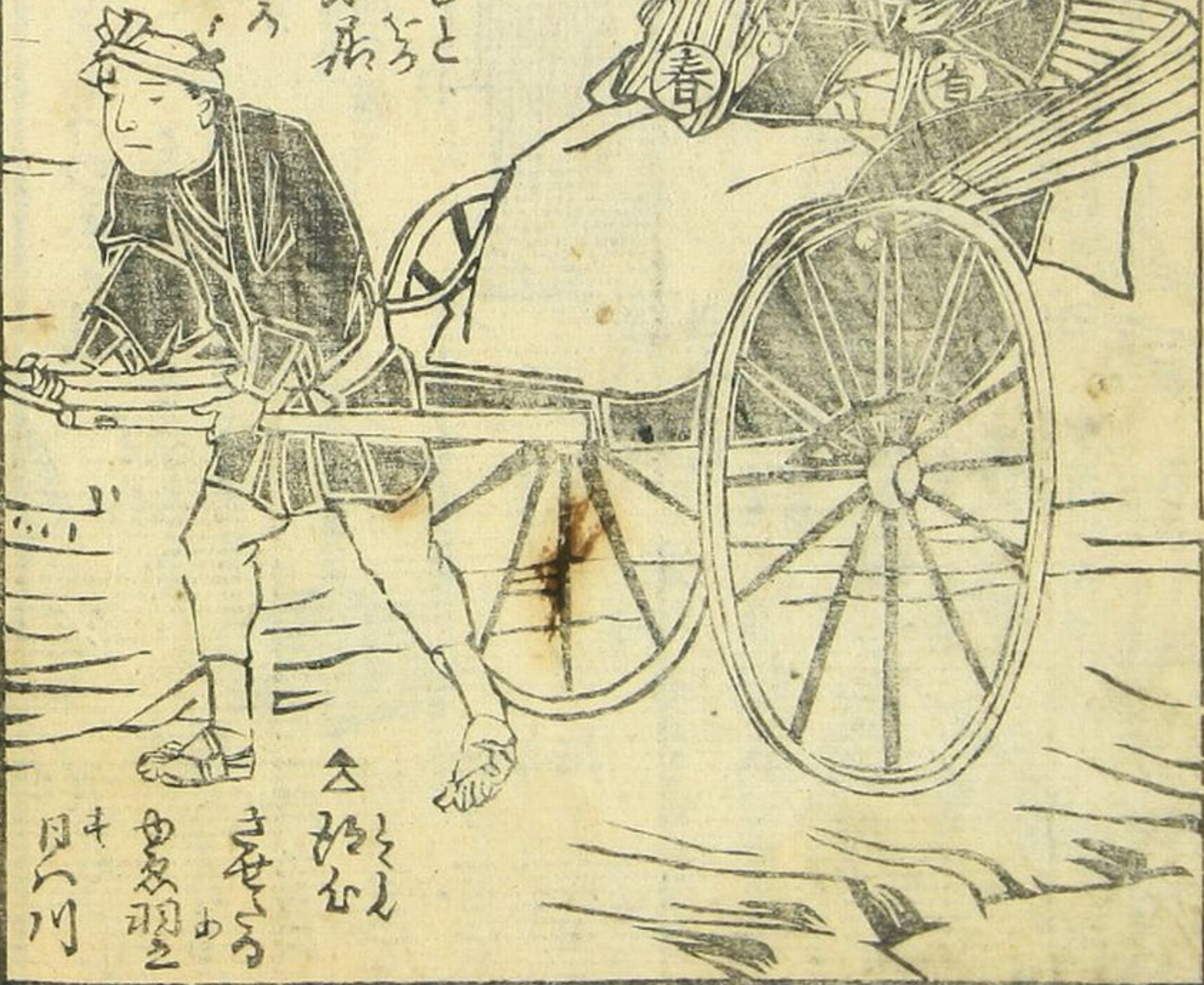
つぎ 借く地金とあつたせー
 とのふいふ財目と裁判あつて
 意よりあつた男とのふいふ清平
 と新所は任む程云所金妻金持
 とつる者よて親戚の借金よ

▲海
 先のと室
 威一あると
 とあつても知
 らぬ懸一
 さきさき
 毛の先も
 角今日の
 遺産がひ
 くらか家の
 方へ姓とそとく
 く仔細とつた



つぎ
りよくせむつあ
る金の文見さし
ゆふ地よ施ま
を池の中ら其い
勝とらつ之妻て

△お心し
あし出
おせだ先おね
しが乳おひ
あひおお
疾まらうら
大夫まらあらま
兼下おさんると
あまきん宅お居
まらけしをまら
のふお合ら思
りくらま金



△お心
まらけし
あまきん
お居
まらけし
りくらま
金

あどはあ務
とまのが専
あうぬと金
務のてをふ
者一帯の
まらとわふ
らうといま
えんや
てい分候かま
えんよく云
せえあま
親つあど
ゆたらめて



△お心
あまきん
お居
まらけし
りくらま
金

つき 女房

みまろりうそと

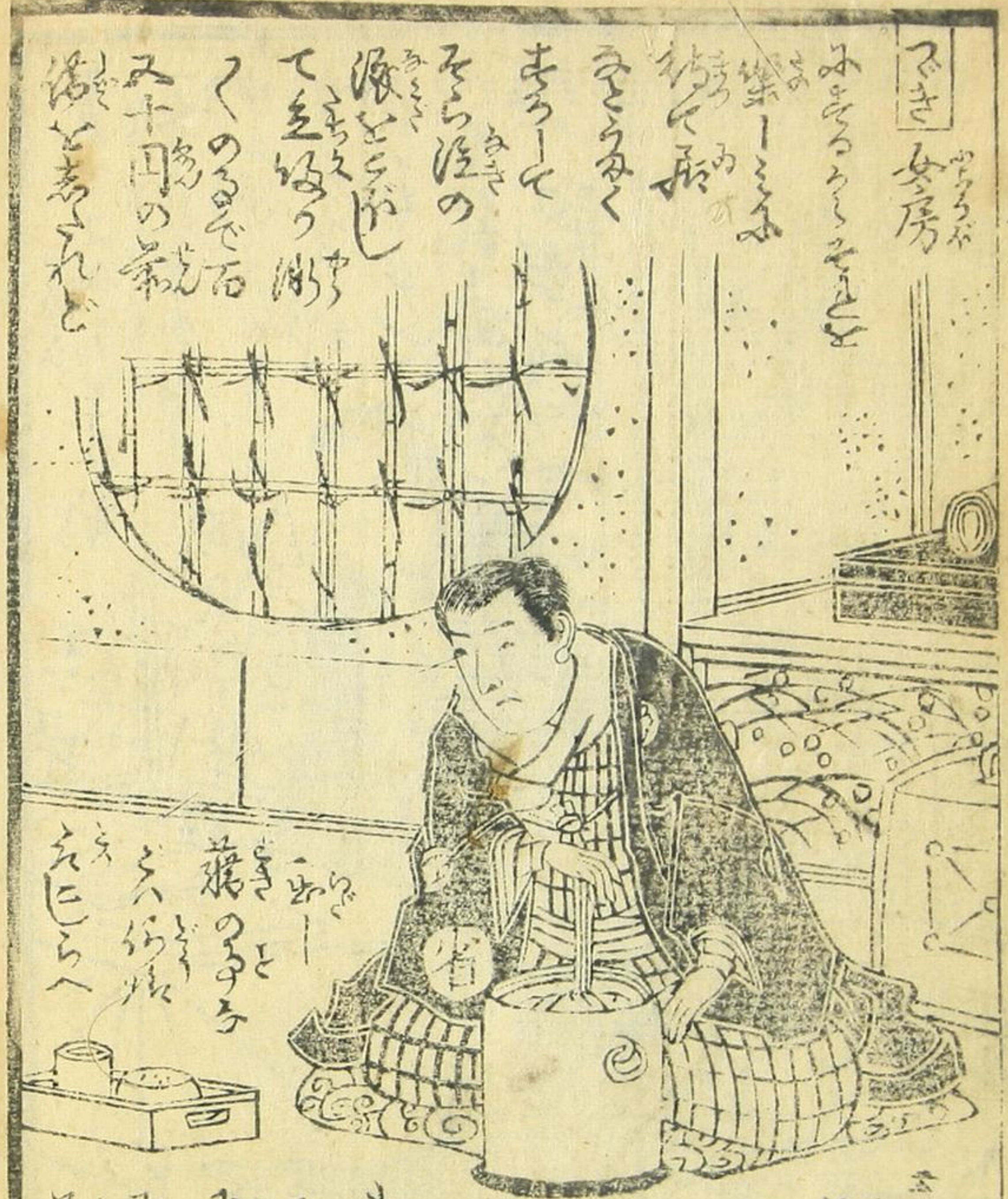
まろりうそと

まろりうそと

まろりうそと

まろりうそと

まろりうそと



まろりうそと
まろりうそと
まろりうそと

南組の田伴
あつてやらんと坊
まろりうそと
まろりうそと
まろりうそと

判人ごの著人ご
のこのらくさみあ入
焚うらうの味百四の
今よるつこと千四の
こが情中へねちと
やがて金さうが裁判
トる
事件へ付付さめり
この家の中用かあへり
序よ殊由書さ
さうと例の辯
あへ有くも後つ
まごめらとて連



官有地の
山林を辨
ひつげと
官有地
山林を辨
ひつげと
官有地
山林を辨
ひつげと

つき 願書とひとしく
 瑞とと 魚海の長
 速と速とるやあ平
 速間海とあり山林
 と拂ひ下る一條と
 迫るの小隙(枝木高)
 が関より川を流の橋高よ
 まるそとくくの
 筒西とふあち
 愛らけんよと相渡せし
 あつと二月
 へ入れときを

▲お家の初
 今の鳥夜
 くらや
 思つ返男や
 つとめとておとす
 のてみまのて二月
 と日とあつてけ
 果ハ分らけのま



おお徳とあり
 茶借全
 茶の
 山あて身
 小後

さつ小徳あ
 石田をうの衣
 附よて千六百田
 後の備けと
 おめいさきと遊んで
 東京ふゆり二
 とあて
 乳よ入つと
 去京揚を所
 のふ川掃鴨
 牧お糸の洋
 へ卦きよふ



●えつと二月
 山あて身
 小後
 かるとのあへけ
 ふおき
 紙影と
 授か
 ね系と身
 文の天全登
 掃と程がが同か
 たりとえしよ

つききて

双葉の

牽とのそを

宿ぬりを

よろお系が

新玉みさる

鳥居所

と若地

のか若

とりくる藤枝屋の二階と
うてあつみ住をせ海舟も
日居をみて居るが成日

ぬら山

侍合



△華野とのふみおね系由
走いお福さるうに五郎う
向ひのあうけ子仲の所
去身の冬もや居る女中とのふら

ま
よ
ま

川橋へた系と遠と成系
銀妻人未病して久しうみ

小郎へつて

格をうと

様と町の

かじまを突お

ある風長後

づもを頼けい

羽一通り

月町二丁目の福山

とのい合系をの

系ををると陣子と

お福真へりか
△華野とのふみおね系由

華野

此方と

ま

ま

ま

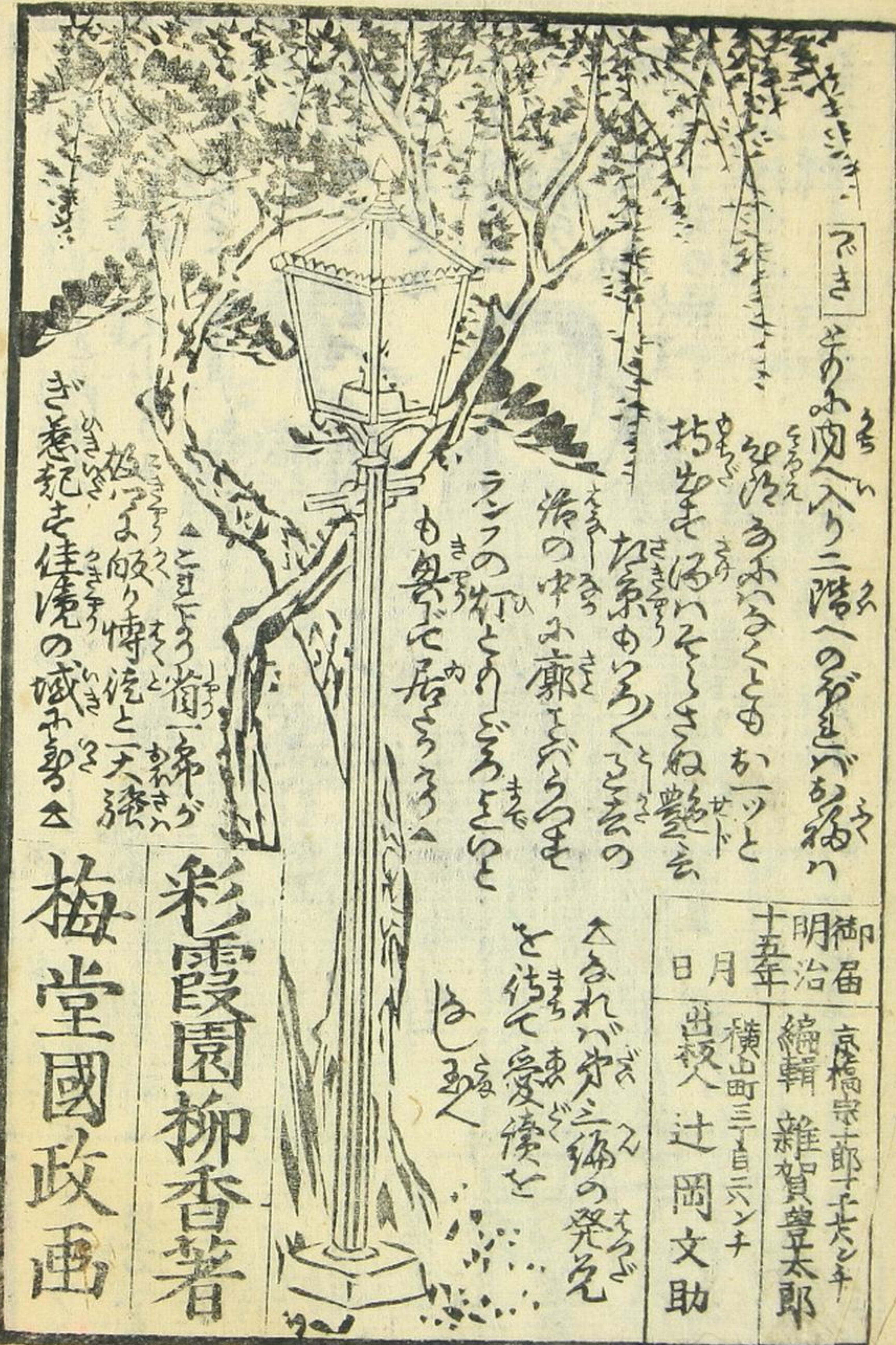
ま

ま

ま

ま

ま



彩霞園柳香著
梅堂國政画

銅版開化世編 全 開化女用文 全

近世紀聞 全 國史畧字引 全

日本小火 全 銅版日本史類正篇 全

明治節用集 全 義烈天竺百首 全

漢語のらは字引 全 金松百人一首 全

補算法大成 全 倭百人一首 全

雅俗日用文 全 一冊袋入五編ヨリ十編讀切

開化三休用文 全 辻岡文助

文 錦繪 問屋 金松堂 辻岡文助

